

備前岡山 “日生(ひなせ)千軒漁師町”

～『アマモとカキの里海』これまでとこれから～

NPO 法人里海づくり研究会議 理事・事務局長

田中 丈裕

備前市日生は岡山県の東南端に位置し、本土と13の島々から成っている¹⁾。日生千軒漁師町と呼ばれ、小型機船底びき網、小型定置網、流し網漁業、カキ養殖業などが盛んな漁業の町である。その歴史を紐解いてみると、縄文の昔から漁業で生業を立てていたことが窺え、室町時代中頃には京、大坂にまで魚を売るほど漁村として発展していた。明治維新の頃には830戸のうち90%が漁業に従事しており、日生の漁師の漁業にかける意欲は凄まじく、三重・和歌山から九州方面まで漁場を求め、1880年代(明治20年頃)からは朝鮮半島、台湾、マニラ、シンガポールにまで出漁していた(加子浦歴史博物館資料、日生町漁協資料)。“つぼ網”という小型定置網は日生の漁民が初めて考案した漁法で、伊勢湾をはじめ播磨灘、周防、肥前などにも普及し、つぼ網を教えるために招かれた人もあったという。御所浦の打瀬網漁も明治十年代に日生村の山田忠九郎からもたらされたとされ、御所浦町嵐口の前島に石碑が残されている²⁾。

また、内海漁業の行詰りを打開し観光漁業として発展を図るため、ハマチ・トラフグなどの養殖業などにもいち早く着手し、1958年にはハマチ40万尾の生産を揚げていた¹⁾。岡山県はカキ養殖業生産量、生産額ともに全国第2位(2013)を誇っているが、日生は主産地としてその一翼を担っている。1903年にカキ養殖の試みを始め、1963年から本格的に着手して1970年代に入って急成長し、1996年には近隣の漁協をまとめ「岡山カキ」として統一ブランド化を達成し、品質向上と販路開拓に貢献した。ここ数年来“海ごみ”の問題がクローズアップされているが、日生町漁協は底びき網に入網する海ごみの回収処理を1982年から30年以上続けている。開始当初には1日に12トもの量になったが、現在では海ごみの入網はほとんどなくなって選別作業が容易になり、漁獲物の鮮度向上や小型魚の再放流など資源管理の実践にも役立っている。1971年にはクルマエビ栽培漁業への取組で第10回農業祭天皇杯を受賞、その後も中間育成放流や資源管理に積極的に取り組み、画期的な試みであった11府県によるサワラ瀬戸内海系群資源回復計画着手にあたっては網目規制の先行着手、受精卵放流、中間育成放流など先鞭を切り推進役を担った。カキ養殖筏の廃棄に伴い発生する竹廃材についても、岡山県林業試験場の協力を求めて2008年に簡易な竹炭製造器を開発、実用化し有効活用を図ったほか、備前焼への利活用にも取り組み「日生のカキ筏から生まれた備前焼プロジェクト」を推進している。

“五味の市”は、1967年、せりを終えた後の漁協荷さばき施設を利用して、市場出荷の売れ残りを地元住民に提供するための浜売りとして始められた。その後、1970年代後半に入って京阪神からの観光客など来客数の増加に伴い、漁業者にとってメインの出荷先となり、漁業者の奥さんが直接販売するため、売れる魚種や売り切れる量を把握し伝えることでマーケットに応じた資源利用が図られ、無駄のない価値実現と資源管理が可能になっている。1999年に建設されカキ焼き小屋を併設した直販所「海の駅“しおじ”」、隣接した漁協直営のレストラン「もやい茶屋」も活用し、地域における観光施設の目玉的存在になっている。このように、日生は漁場環境や水産資源の保全・回復について常に主導的、先駆的な役割を果たし、漁業と観光業等が連携して6次産業化を推進し、古くから人の手を積極的に加えることで発展してきたという面に

において「里海」と呼ぶにふさわしい沿岸地域である³⁾。1950年代までの日生の海は、広大なアマモ場と大小様々な貝床（ホトトギスガイの群落）に覆われた「アマモと貝床の海」だった（下図）。しかし、1960年代に入ると急激な水質環境の悪化に伴いアマモ場と貝床は消失し、「平坦で均一な泥の海」と化してしまう。漁船漁業の衰退とともに1970年代からカキ養殖業が急激な伸びを見せ「カキの海」に姿を変えていくが、この間のたゆまぬ努力によって2010年代には「アマモとカキの里海」として新たな姿を築き上げたのである⁴⁾。そして、これら里海づくりの中心は、ほとんど消滅していたアマモ場を30年以上の歳月と地道な活動を重ね200ha以上にまで回復させたアマモ場再生活動にある。その内容は、大きく分けてアマモ場の再生、海洋牧場づくりと海面利用ルール策定、アマモ場とカキ養殖を通じた環境学習の3つに整理できる⁵⁾。これまでの歩みを追うと、つぼ網漁業者を始め有志だけで着手し地道な取組を続けた「初動期」、カキ養殖業者や底びき網漁業者なども含め漁協全体として取り組むことになった「基盤形成期」、地元商工会や観光協会、OPRI海洋政策研究所や大学の科学者など幅広い関係者が加わり備前市沿岸域総合管理研究会が組織化された「拡大期」の3期に分けることができる。今では、生活協同組合おかやまコープなど流通消費部門、一般市民、地元中学校などが活動に参画し、立場や世代を越えて、漁民と市民と子ども達協働による里海づくりが進められており、環境教育や陸域を含めた地域振興にまで広がりを見せ、さらなる次のステップに踏み出そうとしている。

参考文献

- 1) 吉方士郎：日生町誌，日生町役場，1972.
- 2) 御所浦町：御所浦町誌，pp.362-366，2005.
- 3) 田中丈裕：アマモとカキの里海“ひなせ千軒漁師町”（岡山県日生）. 日水誌，80(1)：72-75，2014
- 4) 田中丈裕：沿岸環境修復技術としての貝殻利用の最前線Ⅱ－物質循環の促進向上に向けて－，pp.115-125，月刊海洋，Vol.47，No.3，2015
- 5) 日高健：『里海と沿岸域管理－里海をマネジメントする－』農林統計協会，2015.

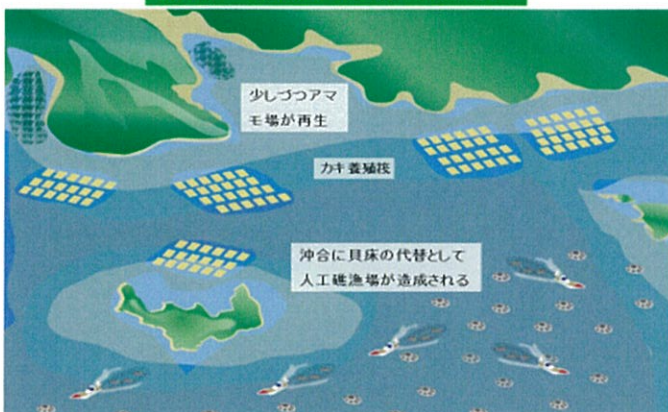
1950年代〈アマモと貝床の海〉



1960年代〈平坦で均一な泥の海〉



1970－1990年代〈カキの海〉



2010年代〈アマモとカキの里海〉

